

史」(一九〇三)は、片倉鶴陵によって狐憑症例の詳しい紹介をしている。そのほかいくつかのところで狐憑症にふれ、前記『奇談集』もほかにしておくの文献をあつめているが、実験した狐憑症例についての本格的論文を呉先生はかかれていない。

(荒川生協病院)

## 日本における包帯の

### 歴史に関する研究

(一) 「繃帯彙編」の原典

蒲原 宏

吉雄種満(一八三八一—一八八二)の訳した「繃帯彙編」は明治七年三月に官許を得ながら、明治十二年九月十五日にようやく東京須原屋から出版している。

五冊(第一冊三五丁六図、第二冊二四丁六図、第三冊二七丁一四図、第四冊十八丁十二図第五冊図版)からなる。例言には「維新以降洋学ノ隆盛前時ニ超出スルハ天下ノ知ル所ナリ即チ醫學ノ如キ窮理分析解剖生理病理ヨリ内外諸科学ノ学日ニ講シ月ニ明ニ精妙皆至レリ、而シテ諸科ノ譯書モ亦多シ独リ繃帯ノ一科世ソノ書ニ乏ク其業ヲ講スルモ亦從テ便ナラス、予西洋一千八百六十九年刊行獨逸国一等軍醫ゴフレス氏著ス処「フルバンド、エンフルバンド、インストリユメント」ノ書ヲ讀ムコトヲ得タリ」とある。原著者のゴ

フランスはドイツ人ではなくフランスの軍医である。訳書の原著者は、Goffres, Joseph Marie G. (1808—1869) で、原著は *Precisiongraphique de bandages, pansemens et appels* (Paris 1854) で再版が一八五八年に出されている。このオランダ語訳 (C. Rademaker A.W.J. Zubi による) が *Handboek van de Leer der Verband en Verband-Instrumenten*, Leiden J.W. Van Leeuwen 1859 として出版され、我国にも輸入された。現在、松江日赤病院蔵(松江藩医学館旧蔵本)と家蔵本(福井藩明新館旧蔵本)の二本の所在が知られている。

「繃帯彙編」は一〇四頁三五図であるが、蘭訳本は六九五頁八一図で、訳書が抄訳であることは明らかである。ことに骨折・脱臼の固定包帯、創傷の持続洗浄法など、原著の後半四分の三には全く手がつけられていない。ギプス包帯の項も全く訳されていないので原著の重要な部分が欠落したような包帯学書として出版されたことになる。

モフレス (Joseph Marie G. Goffres 1808—1869) は一八〇八年一月一七日 Toulouse に生まれ、一八二八年から Strassburg の軍医学校で教育を受け、一八三〇年に Algier

に行き、一八三二年には、Calais と Lille の病院勤務その後 Antwerp の Citadelles の包囲戦に参加するなどの戦場体験を経て、一八三五年 Montpellier 大学で学位を取得する。一八四一年には Metz の軍医学校外科教授となり多くの業績をあげ一八五〇年まで在任している。その間一八四八年には、パリの Hôpital du Gros-Cailion の外科主任にも併任されていた。一八五二年には再び Algier に、一八五五年からは Montpellier, Toulon ついで一八五八年には Vincennes に勤務、一八六四年には Chalon の Lager にあった。一八六九年七月四日 Toulouse で死亡、六一歳。著作としては、前記の包帯学書の他に、

- ① Sur la ligature des artères, (*Journal méd de Toulouse*, 1839—1840) *De emphysemme traumatique et principi-palement*
  - ② de l'emphysemme compliquant les plaies de poitrine. (*Journal med. de Toulouse* 1842)
  - ③ Traite de medec. operatorie (1850)
- 男女泌尿器の手術的治療法について Sedillot (Strassburg) との分担執筆。

④ Sur le traitement des fractures des membres inferieurs par l'appareil de Baudens (Bulet de therap. 1848)

⑤ Considerations historiques, hygieniques et medicales, sur le camp de Chalons (Paris 1865)

として一連の経験症例を Rec. de mem. de med. etc. militaires T. XIII, XIV に発表したものである。「繙帯彙編」は第一巻では外科器械・撒糸・布巾帯の種類、とゲルテイ (Gerdy) による包帯の分類が紹介され、頭頸部の包帯ではマヨール (Major) の分類に従っている。明治五十二年前後にも、オランダ語原書を介して、フランスの外科という十九世紀中頃までヨーロッパの外科学界をリードしていた最先端の臨床技術が受容されつつけていたことを知ることができるのである。

訳編者吉雄種満 (一八三八—一八八二) 略伝諱種満・通称幸沢・天保九年二月十七日長崎に生まれる。父は三代目吉雄幸沢 (一八一三—一八四七)。安政四年 (一八五七) から文久二年 (一八六二) まで松本良順・ポンペ (Jhr. Johannes Catharinus Pompe van Meerdervoort) の下に学び、その後

佐倉の順天堂で佐藤舜海に従学し、慶応元年 (一八六五) 十月長崎施薬外科となるが慶応二年幕府の長崎行政改革のため解任。明治四年十一月三日一等軍医副、明治八年六月三日陸軍二等軍医正、明治十二年六月十八日退官、八月十八日長崎検疫局医官、その後長崎県衛生会委員、医術開業試験委員などを歴任した。長崎樺島町吉雄家四代目である。「繙帯彙編」陸軍の軍医として在動中に編訳し、自家蔵版 (青藜閣) として出版したものである。明治十五年二月二七日四四歳で死亡している。(古賀十二郎西洋医術伝来史 二〇〇—二〇一頁 昭和十七年日新書院刊による。)

故古賀十二郎氏は「繙帯彙編」を、吉雄種満の例言をそのまま引用され「独逸国一等医官ゴフレス氏著述」と前記の遺著に記されているが、翻訳の原典と対比して、オランダ語本からの翻訳ではあるが、明らかにフランス軍陣医学のなかで集大成された成書を原典としており、フランス医学系の翻訳書であることを指摘したい。また原著そのものが十九世紀前半のヨーロッパ包帯学の集大成でもあったが、その全貌の翻訳でなかったことが惜しまれる。

(県立ガンセンター新潟病院)